

ヘロー天気

HERO TENNKI

ワールド・カスタマイズ・  
クリエイター2

## レイフォルド

III・C・C

つかみどころのない風技の民。  
ダブルスパイ  
フォンクランクに仕える二重密偵。

## シンハ・トルイヤード

III・C・C

白金の大剣を携えた怪しげな無技人の旅人。負傷して匿われていたところを、偶然悠介に見つけられる。

## ゼシャールド

III・C・C

ひょうひょう  
ずいぎ  
飄々とした雰囲気の水技の民。  
フォンクランク国王の密命を帯びて、隣国ブルガーデンに潜入している。

## リシャレウス・トゥール

III・C・C

ブルガーデン国の象徴的存在である『水巫女の女王』。五族協和という理想と程遠い国の現状を憂えている。

## バルーシャ

III・C・C

ゼシャールドの命を狙う暗殺者。『氷女』の異名を持つ。

## 田神悠介

たがみゆうすけ

III・C・C

本編の主人公。『災厄の邪神』として召喚された。現在はフォンクランク国の『闇神隊』隊長。ゲームのシステムが元となった能力『カスタマイズ・クリエイト』を操る。

## スン

III・C・C

むぎ  
ルフク村出身の無技の民。  
ゼシャールドの医療活動の手伝いをしていた。

## ヴォレット・ヴォイラス

III・C・C

炎神の末裔といわれるサンクアディエットの王族。少々過激な行動を取るわがまま  
我侖姫。

## フォンク

## ヴォーマル



## エイシャ

## シャイド

## イワカ

## 闇神隊の隊員達

III・C・C

悠介を支える部下。

1

昼過ぎ、田神悠介はいつものようにフォンクランク国の神民衛士隊の控え室に顔を出した。数日前ヴォレット姫に連れられて初めてここを訪れた時は、どこの酒場だというくらいうらぶれた部屋だったが、今は上層階にある宮殿衛士隊の控え室と遜色ない程に整えられていた。

豪華な装飾品などの類は無いが、その代わりに上の階でも見られない特別なソファやテーブル等が並んでいる。

「お、隊長のおでましだぜ」

「お疲れ様です、ユースケ隊長」

入り口の近くに居た『闇神隊』の部下の二人に軽く手を上げ、挨拶に応える悠介。

「うーっす。今日はフォンケとエイシャだけか、他は？」

「イフォカは非番ですよ、ヴォーマルのおやつさんは巡回に出てますぜ」

シャイードは訓練場で自主訓練を行っているらしい。

待機室には彼等以外にも一般の神民衛士達が待機している。宮殿内の派閥やらしがらみに縛られて悠介と距離を置こうとしがちな宮殿衛士達と違い、ここの皆には悠介との交流に躊躇は見られない。

「隊長さん、またララの美酒の味付けしてくださいよ」

「すみません、ランブ割っちゃったんですけど……これ直せませんかねえ？」

「たいちよーさん、この前作ってくれた下着、もう一回り胸のサイズ大きいの出来ませんかー？」  
待ってましたとばかりに色々な依頼を持つてくる。悠介は部下との交流を理由によくこちらの控え室に下りてきては、部屋の調度品を『カスタマイズ・クリエート』で修理したり、持ち込まれた安美酒を美味しく調整するなどして、彼等との親睦を深めていた。

悠介の任務は下々の者達を観察し、彼等の声を聞き、それらをヴォレットに話して聞かせる事である。日々街の巡回任務をこなす一般衛士達からは様々な噂話や裏話を聞く事が出来た。『街が拡張される度に上へと増築が重ねられてきた事で、地下に埋められた旧市街には幽閉された王族の亡霊が住み着いている』等というホラーな話や、『展望塔の天辺から誰かが粗相を仕出かしやがった！』等という笑えない話まで、面白い話から眉を顰めるような話、かなり眉唾なモノまで色々だ。

「隊長は、今日も街すか？ おおっとう、つまみつまみ」

「ああ、いつも展望塔の方ばかり回ってたからな、今日はちよっと別の所も見て回ろうと思う」

リクエストに応え、美酒のつまみに辛味カスタマイズを効かせた干し肉をフォンケに投げ渡した悠介は、酒盛り組の「ウヒョー」という奇声を聞きながら、そそくさと控え室を後にした。

逃げるように立ち去ったのは、エイシャが呆れ顔から怒り顔に移行する所を見たからだ。「寛容というよりも最早率先して羽目外しを許しているじゃないですか」と既に四度程叱られている。

「隊長っ！」

「うひょー」

悠介は廊下を全力ダッシュした。

宮殿を出た悠介は馬車を使わず、カスタマイズによって移動力に高い補正効果のある指輪の力で低民区まで走る。闇神隊の隊服は手袋やベルト、ブーツに至るまで全て身を守る為の特殊効果に特化させてあるので、他の部分は指輪や腕輪などで補うのだ。

マントを翻して高民区や中民区の通りを風技の民が如く突風のように駆け抜ける黒い影。『ギアホークの英雄』が駆け行く姿は、そろそろ街の名物と認識され始めていた。

「さてと、今日はモーフ牧場のある方でも見に行くか」

太陽の昇る方角を東として、街の西北側に向かって歩き出す悠介。展望塔の丁度反対方向だ。ちなみにギアホーク砦は街から西の方角。ルフク村は東のやや南方向にある。

街の西側には家畜であるモーフを放牧している広大な牧場が広がっているのだが、近年隣国ブルガーデンの工作と思われる猛獣や魔獣の被害が相次いでおり、街の北側か東側への移転が計画されている。

牧場は、街の外周に住む無技人達にとってもモーフの世話などで生活費を稼げる良い働き口なので、街に入る事が許されない無技人達は牧場のある西側に多く集まっていた。

そんな無技人街のある低民区西側通りを歩いていた悠介は、知った顔を見つけて足を止める。

「イフヨカ……？」

衛士隊の甲冑姿ではなく、普段着らしき街服を纏ったイフヨカが、胸元に抱えた荷物に半分顔を埋めながらトテトテと小走りに通り過ぎていく。悠介は、『こうして見ると本当に衛士っぽくない普通の少女だなあ』という印象を懐きながら、その姿を眼で追った。

イフヨカは荷物と人込みに気をとられ、悠介に気付く事無く通りを抜けると、街の外周に向かう路地へと入って行く。何となく行き先が気になった悠介は、ぶらぶらと路地を歩いてみる事にした。歩幅が小さいイフヨカの小走りなら、悠介も普通に歩いて付いていける。

薄暗い路地を抜けると、そこには貧民窟のような無技人街が広がっていた。イフヨカのような子が無技人街に何の用事だろう？ と、更に気になった悠介はイフヨカの後を追って無技人街へ足を踏み入れた。

宮殿衛士隊である悠介の姿を見た住人達は皆、慌てて家の中に閉じ籠もるか、脇道に入って身を隠すなど、目立つまいとする。この辺りの反応から、街の外周に住む彼等とさえ、神技人にはあまり良い印象を持っていないらしいと推察出来る。

（街の治安を守る衛士に対してもこの反応って事は、神技人の犯罪とかで無技人に被害者が出た時、ちゃんと衛士隊が動いて無いなんて事も考えられるな）

衛士達から聞く話に無技人に関する話題は殆ど無い。一度ハッキリ聞いてみるべきかと考えていた悠介だが、イフヨカが一軒の家に入って行く所を見て、考え事を中断する。

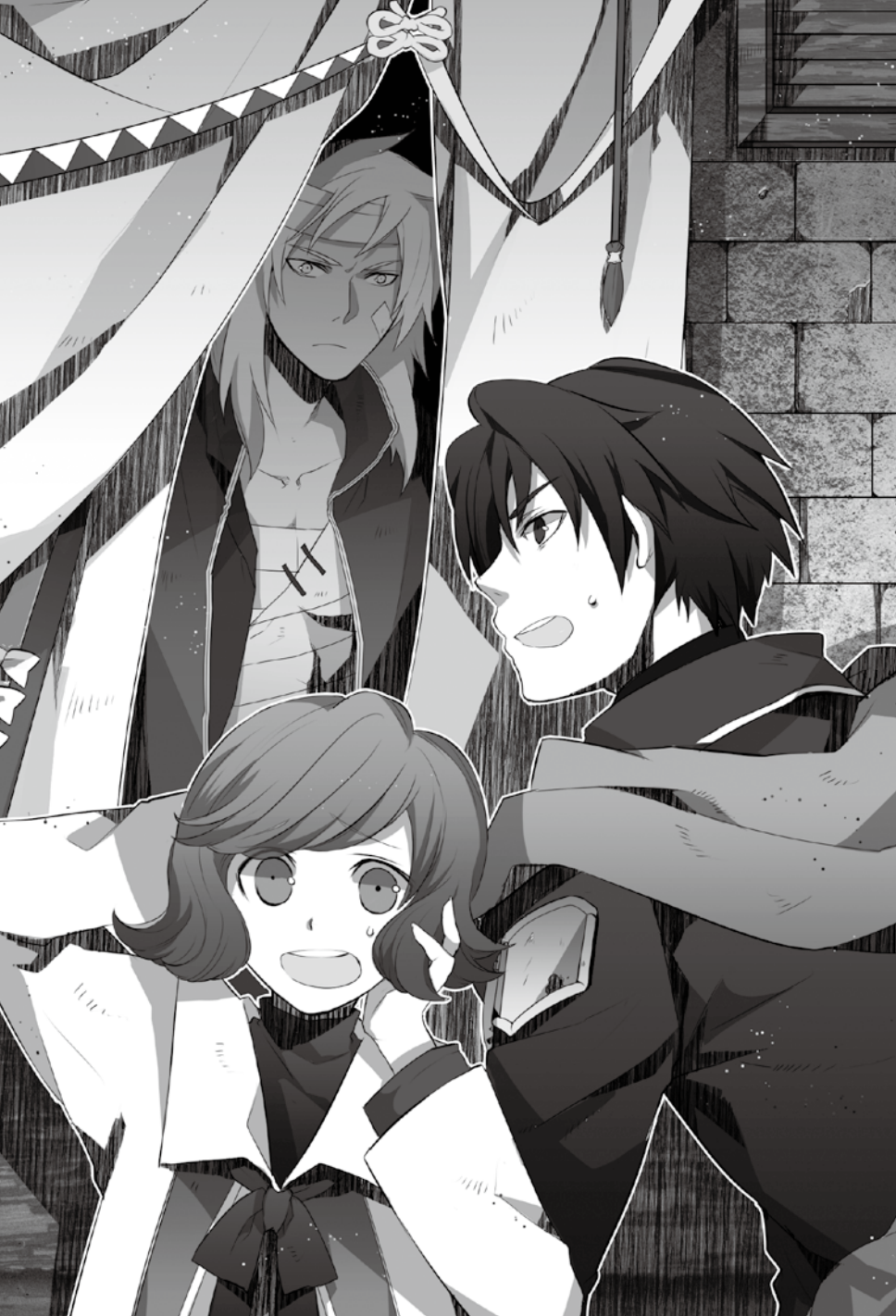
ここまでの道中、擦れ違う無技人街の住人達はイフヨカとは普通に挨拶を交わしていた。単に見かけが普通の少女だからという訳ではなく、知り合いとしての親しみを双方に見て取れた。イフヨカと親しげに挨拶を交わした無技人のおばちゃんも、悠介と擦れ違う時は俯き加減で目を逸らしながら、道の端を恐る恐るといった雰囲気ですき去って行ったのだ。

「うーん」

イフヨカの入って行った家は、角石と木材で組まれた粗末な一戸建てだった。悠介がその家の前まで歩いて行くと、中から話し声が聞こえて来た。

「もう行くのかい？ もっとゆっくりしていけばいいのに」





「うん……でも、衛士隊の訓練もおかないと……仲間に迷惑かけちゃうから」

普段より若干流暢に話すイフヨカはそう言つて家の布扉を潜り、そこに悠介の姿を見つけて思わず跳び上がった。

「ひえっ！ た、隊長！」

「や、やあ」

「ああのっどうしてここに？」

「いやあ、ちょっと街で見かけたから、どこ行くのかなーと思つて……」

素直に『後を付けてきた』とは言い辛く、ちょっと気まずそうに言葉を濁す。それを別の意味に解釈したイフヨカは凄い勢いで釈明を始めた。

「ちちち違ふんです！ 隠してた訳じゃ無いんです！ い、今任を解かれると……こ、困るんですっ！」

「お、落ち着け、落ち着け。何の事やらさっぱり分からんぞ」

「……どうした、イフヨカ」

そこへ先程家の中から聞こえた声とは違う男の声が響き、頭と身体に包帯を巻いた白髪はやや大柄な若者が布扉を捲つて現われた。若者の後ろには、心配そうにこちらを窺っている年輩の男性と女性の姿も見える。その二人も無技人である事を示す白髪に白瞳だった。

包帯を巻いている無技の若者は悠介の姿に一瞬眼を瞠<sup>みは</sup>るが、すぐに納得したような表情になる  
と――

「アンタが、ギアホークの英雄か」  
そう言って不敵な笑みを見せた。

## 2

イフヨカの両親は無技の民だった。通常、無技人が神技を宿す子を生んだ場合は、大抵は神技人の里親に引き取って貰う事が多い。逆に、神技<sup>しんぎびと</sup>人の女性に無技の子が宿れば、それを確認した時点で堕胎したり、産んでも無技人の里親に引き取らせる場合が殆どだ。

イフヨカの場合はたまたま引き取り手の里親が見つからなかった事と、両親が神技人の街の外周に住んでいる事から、いずれ成人した時に神技人として街にも受け入れられ易いだろうと、そのまま無技人街で育てられた。

イフヨカが少々内向的なのは、無技の子供ばかりの中で一人だけ緑色の髪と瞳を持っていたため、中々輪に溶け込めずに苦労したからなのだ。

等民制の下では、子供が成人するまでは親の神格が適用される。無技人の親を持つ神技人の子供には、子供にだけ神格に見合った身分が与えられる。イフヨカは神民衛士隊の入隊規定年齢に達しすぎて、老いた両親を養う為に入隊した。そして数日前、闇神隊の部下として選ばれた事で給金も上がり、牧場で怪我を負って働けなくなった両親を養っていく事にも目処<sup>めど</sup>がたった。

しかしながら、宮殿衛士隊は基本的に身分の高い者ばかりで構成されるエリート部隊。部下といっても体裁を取り繕う為だけに適当に選ばれた、たまたまあの場で伝達系風技を扱う者が他に居なかったという幸運によって得られた立場である。

イフヨカは自分が無技人街出身である事を悠介に知られれば、闇神隊の体裁の為に任を解かれるのではないかと不安を抱えていた。家の前で立ち話も何なので、悠介を家に迎え入れようとする両親に眩暈<sup>めまい</sup>を覚えながら、意を決して自身の出生や立場、家族の現状などを打ち明けた。

「そーなのかー」

悠介はその一言で済ませた。

黙っていた事を罵<sup>ののし</sup>られるだろうか、無技人の両親を持つ事を嘲<sup>あざけ</sup>られるだろうか。そんな不安と緊張で身を固くしていたイフヨカは、「大変だったなあ」と気遣いまでみせる悠介の反応に、力が抜けて座り込みそうになりながら安堵の息を吐く。

(やっぱりこの人は少し違う)

悠介を見上げたイフヨカは、改めてそんな風に思うのだった。

「へー、旅人かあ」

イフヨカの家にお邪魔した悠介は、先程の若者について話を聞いていた。

彼が大怪我を負った状態でこの家に運び込まれたのは、悠介が仕官しに宮殿を訪れる少し前。イフヨカの両親がモーフ牧場で魔獣に襲われていた所へ助けに入り、その時に負傷したのだという。

シンハと名乗った彼は、諸国を放浪する旅人らしい。この世界でも旅人の存在は珍しく無いが、神技の力という加護を持たない無技人が一人で旅をしているというのはあまり見られない。

しかも彼は剣を持っていた。少なくとも、フォンクランク国領内の無技人が狩猟以外で武装する事はまず無い。故に、彼は怪しげな無技の旅人と言える。

イフヨカの家には治癒系水技すいきの医者と呼べる程のお金も無く、またわざわざ無技人街まで怪しげな無技の旅人を治療に来てくれるような物好きも居ない。「お互いに傷が癒えるまでこの家でゆっくり養生しよう」とイフヨカの両親に勧められたシンハは、暫く世話になる事にしたのだそうだ。

「その剣って本物？」

「……ああ、勿論そうだが。やはり気になるか？」

シンハは悠介が武装の事を気にしているのかと考えた。神技の民にとって無技の民は無力な存在

でしかなく『無力な存在でなくてはならない存在』でもある。特に、フォンクランクのような歴史ある等民制国家なら尚更その傾向は強い。

そのフォンクランクの宮殿衛士、ましてや英雄と称えられる精鋭衛士としては、武装した無技の旅人が首都に入り込んでいるなど、見過ごせない事柄なのかもしれない、と。しかし――

「いやー剣らしい剣とか見たことなかったから」

珍しくてつい見惚みとれていたという悠介を、シンハは訝いぶしんだ。何かしら探りを入れて来る気配も無く、見かけも変わっているがどこか他の神技人達とは根本的に違うような印象を懐いだく。

その時、イフヨカの母が「いつも娘がお世話になってます」とお茶を持ってやって来た。

「あ、ども」

悠介はお茶を受け取ると一口啜する。その姿を見て、シンハは違和感の正体が分かった。

無技人の老婦に頭を下げ、無技人の安っぽいお茶に躊躇無く口をつける。悠介には差別感が見られない。殆どの神技人が持つ、無技人に対する優越的な感情の気配がまるで無いのだ。

「……見るか？」

シンハは壁に立てかけてあった大剣を悠介に差し出した。悠介は本物の剣を見るのは初めてだったので、喜んで見せて貰う。かなり大型の両手剣。丈夫そうな皮製の鞘さやに収まるそれを手に取ると見た目通りに重く、ずっしりとくる。



「ん？ 折れてるのか」

「ほう、持っただけで分かるのか」

早速カスタマイズメニューを開いてステータスを調べていた悠介は、剣が中程で折れている事を確認した。素材は晶貨（お金）よりも高級な金属らしい、白金の大剣。

「これって、牧場に出たっていう魔獣とやり合っただけで折れたとか？」

「いや……フォンクランク領に入る前はブルガーデン領を通って来たからな、連中とやり合った時に折れてしまった」

なるべく街道を外れて森の中などを進んでいたのだが、国境沿いでブルガーデン国の工作部隊らしき小集団と遭遇し、一戦やらかしたらしい。その話に目を丸くしているイフォカをよそに、日々カスタマイズ能力の錬度を高めて扱いなれて来た悠介は、こういった武器にも力を反映させてみたかと考えていた。

部下の短剣以降、カスタマイズした装備品は隊服や指輪くらいなので、『カスタマイズ・クリエート』本来の用途である武器の強化とその効果には興味がある。

「良かったら修理しようか？ これだけ良い剣なら色々特殊効果も付けられると思うし」

イフォカが目を丸くしたように、シンハは今の話に色々と自分の素性に関する捨て置けないキーワードを含ませていたのだが、まるで意に介した様子も見せない悠介に、彼は益々興味を惹かれた。

実際は、単なる悠介の知識不足のせいなのだが。

衛士のような立場の人間であれば、今の話を聞けば誰しもが思い浮かべる『とある地域』の事を、悠介はまだ知らなかった。悠介の事情を知らないシンハは、悠介の対応を度量の深さと受け取っていた。あながち間違いとも言えない勘違いであった。

『ギアホークの英雄』の人となりを知ったシンハは、その力も是非この眼で見ておきたいと、剣の修理を頼む事にした。

悠介はカスタマイズメニューで剣の状態を弄りつつ、最終的な仕様を決める為に色々と質問を投げかける。

「そうだな……斬り返しをもう少し速くしたいとは思っているのだが、これ以上軽くなると威力が心許ないのではな」

床上の折れた剣を前に、宙に指を彷徨わせつつ戦い方や戦闘の嗜好などを質問する悠介の姿を、シンハは特殊な生産系神技を使う時のリラックス効果を狙った行動と見ていた。

質問そのものに意味は無く、折れた刀身を接合する為に必要な集中力、それらを雑談によって得ているのだろうと。実際、彼の愛剣を創った神技職人にも、余程集中しなくてはならない所以外は、作業中はほとんど喋りっぱなしという者が居た。

「んー、こんなもんかな……実行」

シンハの意見では、余り斬れ過ぎるのも困るとの事だったので攻撃力は据え置き。斬るよりも叩き付ける使い方をしているそうなので、剣の耐久力が劣化しないよう耐久値を上限固定に設定した。更に攻撃速度上昇効果を付与し、一人旅の危険性を考慮して体力回復効果と治療効果も付けた。

光のエフェクトが白金の大剣を包み込む。この光景を既に見慣れているイフヨカは相変わらず綺麗だなあという表情で眺めていたが、彼女の両親は目を瞞って美しい光の帯に見惚れていた。

長く諸国を渡り歩いて色々な神技を見てきたシンハも、こんな現象は初めてだった。やがてエフェクトは光の粒を残して消え去り、床上には修理された美しい刀身を持つ大剣が残されていた。

「一応、治療効果も付けたから、その傷も治ると思うよ」

「治療効果？」

悠介の言葉を訝しみながらシンハは愛剣を握った。その瞬間、身体中に力が漲るような感覚があり、傷口に熱と痒みが走る。

「これは……！」

包帯を解いてみると、背中から脇腹、胸元にかけて刻まれていた傷がジリジリと塞がっていく。まるである程度熟達した治療系水技のような効果が自身の愛剣から発せられている事に、彼は驚きを隠せない。

「とりあえず要望通りに攻撃力は据え置きでそのまま、攻撃速度上昇を付けて耐久力も弄つていたから」

「要望……」

一撃で折れるような負荷でも掛からない限り、どれだけ使っても壊れる事は無いはずだと説明されて、シンハは自分の愛剣を見つめる。見た目は鍛え直したときのような感じだが、確かに、今までと比べて握った感覚に違和感があった。

剣の具合を確かめたいというシンハに、悠介は試し斬りを提案した。とりあえずイフヨカの両親にも握らせて二人の傷を癒し、家を出て適当な空き地を見つけると、悠介は地面のカスタマイズで的にする案山子を作り始める。

その間、シンハは二度三度と剣の素振りをを行い、悠介の言った攻撃速度上昇の効果を身を以って感じ取った。剣が軽くなった訳でもないのに、明らかに速く振るう事が出来るのだ。

「案山子だすぞー」

悠介はそう告げると、カスタマイズ能力で作った土の人型を出現させた。素材はこの辺りの土だが、石のように固めてある。シンハはいきなり案山子が出現した事にも驚いていたが、その強度を確かめて『コレで試し斬りをするのどうか』と躊躇いをみせた。

「大丈夫だって。その剣、素がかなり丈夫にできてるし」

先ほどの悠介の説明を思い出し、シンハは半信半疑で土石の案山子と向かい合う。

三角形を描くように配置された三体の案山子。スツと腰を落としたシンハは一呼吸で手前の二体を袈裟懸け、横薙ぎと続けざまに両断すると、難いだ勢いのまま身体を捻るように回転させて奥の一体に大剣を叩き下ろした。真つ二つに割れる土石の案山子。

「おおつ、すげえ豪快！」

「……驚いたのは俺の方だ、なんだこの素晴らしい剣速は」

欠片も刃こぼれていない愛剣の刀身を確かめながら、シンハは抑えきれない笑みをこぼしつつ自身のイメーヂを上回る剣速に感嘆していた。少々野性味の強い獐猛な笑みに、イフヨカがこそつと悠介の背に隠れる。

暫し愛剣の力を堪能したシンハは、剣を鞘に収めて礼を言くと、悠介の意図を確かめるべく問いかけた。

「正直、有難い。だが、これほどのモノを……よそ者の俺に与えていいのか？ それに、俺は無技の民だぞ？」

「あー俺、ナ二人とかその辺りに偏見無いから、部下の両親を助けてくれた御礼って事でいいんじゃないかな？」

一応、特殊効果を簡単に付与できる事は口外しないでくれと注意を与えておく。悠介の言葉や態

度に、何ら含むモノも無ければ偽りも無い事を読み取ったシンハは、ヴォレットに似た楽しそうな表情を浮かべた。

「アンタは面白い神技人だな。俺はガゼッタ国のシンハ・トルイヤード。いつかアンタの力になる事を約束しよう」

そう言つて差し出されたシンハの右手を、悠介はしっかりと握つて握手した。特に深く考えた様子も無く、普通に握手に応じただけに見える悠介を、シンハはやはり面白そうに見つめていた。

そろそろ夕方になろうかというサンクアディエットの街並みを眺めながら、悠介はイフヨカと並んで衛士隊の詰め所に向かつていた。あの後、剣も直つて傷も癒えたシンハは、もう一晩泊まつてから旅に出ると言っていた。

「そういえば、無技人街の人達ってイフヨカとは普通に接してるよな」

「はい、私は……小さい頃からあそこに居ましたから……」

他に無技人街で親しくしている衛士はいないのかと訊ねる悠介に、イフヨカは静かに首を振って答える。

「みんなは、衛士の事をきら……怖がってますから……街の神技人と何かトラブルが起きると、いつも……」

「割りを食わされてる？」

ショートの緑髪を揺らし、こくりと頷くイフヨカ。

「ふーむ」

四大神信仰の神格を基にした等民制国家。大多数の人間はそれぞれの神から加護と祝福を受けた証として神技を宿す、とされているので神技を持たない無技の民は神から祝福されていないと考えられている。

国教と信仰に根差した問題だけに、等民制度の中で無技人達の地位を向上させるのは中々難しい所だろう。しかし、その事と衛士が役割を果たさない事とは別問題だ。トラブル——犯罪の取り締まりに無技人も神技人も関係無いはずだと悠介は考える。

「どうしても身分つてのは関係して来るんだろうけど……治安維持は手を抜くべきじゃないよなあ」  
「隊長……？」

悠介は無技人との関わり方について、考えを巡らせ始めるのだった。

### 3

夜明け前の薄暗い中、要塞都市パウラの長大な防壁の陰で、ゼシャルドはコレまでに掴んだブルガーデンの内情を纏めながら、レイフォルドからフォンクランクの近況報告を受けて今後の活動方針を練っていた。

「そうか、ユースケは上手くやっておるのじゃな。それにしても……聞く限りでは凄まじい力じゃな」  
「流石にアレには僕も驚きましたよ」

危うく巻き込まれるところでしたと彼は笑う。

今、この要塞都市パウラでは、ギアホーク砦で風の団が壊滅した事により、戦力の復旧を急ぐ動きが活発化していた。神民兵からの引き抜きや新兵の募集などで連日バタバタしていて忙しい。その為か、ゼシャルドに対する監視も日に日に緩くなり始めていた。

「ワシは近々、水巫女の女王に接近する」

「……第一首都、コフタですか」

ブルガーデンは元々山頂のシャルナー神殿に集まる信徒達が神殿の周囲に住み着いて街を形成し、

そこから建国された小さな王国だった。そして第一首都である山頂の街コフタには、シャルナー神殿を居城に国民から絶大な支持を受ける女王が君臨していた。

現在は第二首都、要塞都市パウラにて軍民を統治管理する指導者、元ブルガーデン国王の側近でもあったイザップナー最高指導官がほぼ全ての実権を握っており、要塞地下に設けられた議会議堂を中枢としてブルガーデンの政治を動かしている。

しかし、水巫女の女王が持つ国家の象徴としての権威と国民の人気は絶大であり、女王が正式に即位するまでの後見人だったイザップナーは、形式上、軍資金の要請や国費で事業を行う場合などは女王に御伺いを立てて了承を得るという手続きを通さねばならなかった。

水巫女の女王リシャレウスと、イザップナー最高指導官、両者の間には反目こそ見られないものの、双方の政策や意見は決して一致している訳では無いらしい。お互い無干渉に近い関係で、第一首都と第二首都それぞれに個別の統治を布いている。

ゼシャルドはこの辺りに付け込める隙があるのではと見ていた。

「なら、こつちの観察情報もそつちに運びますよ」

「いつもスマンのう」

「いやあ、ユースケ君から報酬は貰ってますから」

「報酬？」

首を傾げるゼシャルドに、彼は微笑みながら小さい虫のような物体を取り出して見せた。

「よく釣れるんですよ、この釣り針」



悠介がサンクアディエットの通りでイフヨカを見かけていた頃、ゼシャルドはパウラの中心街から外れた長城部分の上道通りを歩いていた。パウラの一般民の住居は北側の中心街に集中しており、重要施設などは殆ど中心街の地下に当たる要塞内部にある。

ブルガーデンの国土の半分以上を占めるボーザス山の麓に沿って造られた要塞都市、その長城部分はサンクアディエットの半周分にも匹敵する実に長大な防壁要塞だ。

防壁内部には各神民兵組織の訓練施設や宿舎などもあり、中心街からもれた一般民や神民兵の家など暮らしている。沢山の空き部屋があるので、神民兵達は適当な部屋を見つけては『〇〇分隊の部屋』などと勝手に札を付けて割と自由に使っていた。

「……ふむ」

中心街から離れたこの辺りにも、移動式だが多くの店舗が並ぶ。ゼシャルドはふと一軒の店の前で足を止めた。首輪を付けた数人の無技人が店の前に繋がれている。一人、足に怪我を負ってい

る者がいるらしく、負担が掛からないよう座り込んで、しきりに小さな出血を気にしている様子だった。

ゼシャルドは徐に歩み寄ると、彼女の怪我に水技の治癒を施す。傷を癒して貰えた彼女は御礼を言いたそうにしていたが、勝手に喋ると主人から鞭が飛んでくるので困り顔を見せている。

「いいんじゃないよ、言わずとも分かっている」

「……」

頭を下げる無技人。丁度その時、店から出て来た彼女等の主人らしき男が威圧的に声をかけてきた。

「おい、うちの飼いの無技に何か用か」

「いやなに、怪我をしておるようじゃから治癒しておったのじゃよ」

「？……っあ、あんた……ゼシャルド神技指導官！」

飼いの主の男は相手がゼシャルドだと分かると、慌てて態度を改めた。貴重な人材ゆえに水技の民の発言力が大きいブルガーデンだが、その中でもゼシャルド程の熟達者となれば別格だ。

「いやあそうでしたか、ですがあの……今はちよつと余り持ち合わせが……」

「構わんよ、趣味の治癒じゃからして気にするな」

報酬を渋ろうとする飼いの主に、ゼシャルドは『金なぞ要らん』と手を振った。飼いの男が飼いの無技達を連れて去っていった後、この国の無技人達の扱いを不憫に思い、溜め息を吐く。

等民制国家では神々の祝福を受けていない民として扱われる無技の民だが、四大神に神格の差異は無いとするブルガーデンでは、神技を持たないモノは人にあらずとされ、無技の民は亜人扱いなのだ。

「ゼシャルド指導官」

「ん？ おお、プラウシャ君か。もう、良いのかね？」

「はい、ご心配おかけしました……明日からまた訓練に出ますので、宜しくお願いします」

ゼシャルドに声をかけてきたのは、彼のこちらでの教え子でもある水の団候補生の少女だった。ここ数日は訳あって訓練を休んでいたのだが、やはり水の団への入団を目指す気持ちに変わりは無いという。

「ずっと決めていた事ですから……もう、お姉ちゃんは居ませんけど」

「……そうか」

彼女の姉の亡骸はギアホーク砦の一報が入った後日、フォンクランク政府から返還された。所々が欠けた姉の遺体を前に、茫然自失で佇んでいた姿は、ゼシャルドの記憶にも新しい。陰った空気を払うように、プラウシャは明るく話題を振った。

「そういうえば、指導官はフォンクランクで沢山無技を飼ってらしたそうですね、やっぱり水技の実験に？」



「いや、ワシは彼等の村と一緒に暮らしておったのじゃよ」

「え？ 無技とですか？」

家でも昔一匹飼っていたという彼女は、心底不思議そうにそう問い返すのだった。

◇◇◇

要塞都市パウラから山側に少し入った辺りに、精鋭団専用の育成訓練施設がある。そこは初めから精鋭団に入団する事が決まっている身分の高い者にしか利用出来ないエリート育成施設、士官学校のような施設だった。

その施設の敷地を閑所として、整地された山道を上って行くと、ブルガーデン第一首都コフタの街に入る事が出来る。

シャルナー神殿の膝元に広がるコフタの街は、山頂付近の僅かに開けた場所を街の入り口として無数に掘られた坑道の中に居住施設が広がっている。カルツイオ世界で最も高い場所にある地下の都であった。

山頂の神殿を居城として、日々静かに暮らすことを望む水巫女の女王リシャレウスは、執政官から届けられた書状に憂鬱な溜め息をもらす。謁見を要請する内容のそれには、ゼシャルドの名が

記されていた。

最近ブルガーデンの神技指導官に就いたと聞く元フォンクランクの宮廷神技指導官。またぞろイザップナー最高指導官が絡んでいるのだらうと思うと、気持ちが悪くなるというものだ。

十四歳の頃、建国者でもある父王を亡くした彼女は、十六歳で正式に即位するまで、後見人となったイザップナーの献身的な働きに支えられながら、新興国ブルガーデンを大国フォンクランクと並ぶ地位まで押し上げ、国の象徴的存在として崇められるようになった……というのがブルガーデンの一般国民が持つ認識である。

イザップナーは王亡き現状は亡国の危機にあると国民を煽り、隣国に付け入られないようにフォンクランクを牽制するという名目で、パウラ要塞の都市化事業を進めながら、国の中枢を自分の派閥で固めていった。

彼が急速に実権を握っていく事への懸念を示す旧党派官僚達もいたが、イザップナーはリシャレウスを国民的象徴に添える事で王の権威を持たせ、臣下としての深い忠誠を表わした。

そうして『臣下の忠誠に対する信頼』という形を以ってリシャレウスに自らの活動を支援するよう仕向ける事で、旧党派官僚達の批判や疑惑の目を躲けて来たのだ。

女王に即位する頃には、リシャレウスもイザップナーの献身が亡き王と残された王女への忠誠などではなく、己が野望の為だという事に薄々感付いてはいた。しかし、頼る者のいなかった彼女は

彼を王の忠実な臣下として扱うしかなかったのだ。

そうなるよう、身の回りに置く者にも仕事を仕掛けられていた事に気付いたのは、ずっと後になつてからの事である。

「会わなくちゃ駄目なのかしら……」

もう一度、憂鬱に溜め息を吐きながら、リシャレウスは側近を呼ぶのだった。

◇◇◇

「難しい問題じゃな」

「だろうな」

宮殿に戻った悠介は早速その日に得た情報を自身の上司、フォンクランク国の王女ヴォレットに報告した。シンハの事を話した時、ヴォレットのお付きである炎神隊隊長クレイヴォルが顔色を変えて席を立とうとしたが、ヴォレットはそれを引き止めると一切の口外を禁じた。

そして悠介にもシンハの事はしばらく誰にも話すなど釘を刺す。彼についての詳しい話は、また後日にでもと言うヴォレットに、悠介は何か複雑な事情でもありそうだと判断して頷いた。

その後、無技人街の事を話題に、無技人と神技人との関係について話したのだが、一般衛士達も

含めて意識改革をという悠介の考えは、謂わば信仰にも関わる問題だけに中々難しいのではないかとヴォレットも腕を組む。

「そもそもじゃ、今の制度を引っくり返すような事をすれば国は混乱するじゃろうからしてな」

「まあなあ」

「もしそうだった時、頼れるのは己が力だけじゃろ？」

「絶対数からして我々神技の民の方が多い。結局今以上に無技の民は厳しい生活を強いられる事になるだろう」

等民制の中で無技の民の地位や扱いを向上させようと思うなら、徹底的に無技の民に対する既成概念を変える必要がある。刷り込みのような教育を子供の内から行い、数十年以上続けてようやく実現できるかもしれないとクレイヴォルは言う。

しかしそれは限りなく不可能に近いと補足を付けた。必ず反対する者が出る。

「だが、治安に関する不正や差別については何とか出来るな」

「何か良い案ある？」

「簡単なことだ、『衛士としての誇り』を理由に任務遂行の意識を引き締めればいい」

「あ……誇りかあ……うーん」

どこか困ったような愛想笑いで頭を掻く悠介に、自分は今なにかおかしな事でも言ってしまった

のだろうかと不安になったクレイヴォルが戸惑った表情を浮かべる。

そんな彼の内心を察した悠介は、『一般衛士』にとつての『誇り』がどの程度の価値なのか説明した。衛士になれば給金で食べていける。誇りは食べられない。それだけだ。

「名誉とか誇りつてのは、ソレを追いかけてやっていける人達には価値があるんだろうけどね」

大事な家族と誇りのどちらを選ぶか。一般民は家族を選ぶ。誇りや名誉がくだらないとは言わないが、現実問題として、一般民は誇りと名誉だけでは暮らせないのだ。

「ま、異論はあるだろうし必ずしもそうとは言いきれないけど」

「うーむ……確かに……我が王も名誉より実を選ぶ方であるし……」

眉間の皺を増やしてぶつぶつと考え込んでしまったクレイヴォルをよそに、ヴォレットは官僚達の間で当たり前のように横行する汚職、賄賂の類が、一般衛士や一般民の間にもあるのだなと、ふむむ頷いていた。

「意識改革は簡単にはいかないだろうけど、国のトップが協力してくれるなら手っ取り早い方法はあるんだよな」

「ほう？ それはどんな方法じゃ？」

「保護条例の公布」

悠介の端的な答えに、ヴォレットが小首を傾げながら問う。

「保護？ 無技の民を保護する条例を作るのか？ どんな理由でじゃ？」

「弱者救済とか、ブルガーデンへの当て付けとか、表向きの理由は何でもいいんだよ」

何かそれらしい理由をでっち上げて無技人達を保護する決まり事を作りあげる。ブルガーデンのように無技人を所有している者の少ないフォンクランクでは、別段『無技の民を保護する条例』を出したところで困る人間も殆ど居ない。

フォンクランクにも奴隷は存在し、その中に無技の民も居るが、元々待遇は大して変わらないので保護条例による影響は少ないと考えられる。

ちなみに、フォンクランクに限らず奴隷は神技人の方が数が多い。所有する奴隷の質がそのまま所有者のステータスに繋がるので、無技人の奴隷よりも神技人の奴隷を連れている方がより格調高く見られるのだ。

「ふーむ。条件はそう悪くないか」

「姫様、まさか本気で王にそのような進言をなさるおつもりではないでしょうね？」

クレイヴォルが呆れ半分、心配半分でヴォレットに問い掛け、悠介にも「貴殿も姫様に適当な事を吹き込まないように」と注意を促す。が、悠介は至って真面目に考えての提案である。

「ではクレイヴォルよ、無技の民達が不当に扱われないようにする為の良い対案はあるか？」

「いえ、それは……」

咄嗟<sup>とつさ</sup>には思いつかないし、そもそもそんな事をする必要性はあるのかと疑問に思いつつも、衛士達の不正を無くそうとする活動を一概に無駄な事だとは斬り捨てられないクレイヴォルは悩んだ。

「決まりじやな。なーに、そう難しく考える事は無いのじや」

それを行う事でどんな益を得て、どんな不利益を被<sup>こうむ</sup>るか。大局的な視点で判断すれば良いのだと、ヴォレットは指を振り振りそれっぽく語って見せる。

「なんかヴォレットが頭良さそうに見える——雨降るかもな」

「わらわはアホではないぞっ!」

悠介の茶々に、以前にも聞いたような台詞で応えるヴォレットなのであった。

「ちちさまあ……わらわのお願い、聞いてほしいのじや」

「うーむ、また突拍子も無い事を……」

父王の膝に乗って甘えるヴォレットが猫なで声で懇願する。目尻と鼻の下を伸ばしながらも威厳だけは保ちつつ検討している素振りを見せるエスヴォブス王は、内心でゼシャールドの事を考えていた。

かの親友が『憩いの場』だと言って暮らしていた無技の村には、悠介の仕官による特典で警備の衛士を駐在させ、輸送支援などの優遇処置が取られている。その事で何か問題が起きた例は無い。

街の住人達の暮らしにも貢献している外周の無技の民を、少しばかり大事にしたところで特に問題は無いだろう。エスヴォブス王はそう判断した。

「ヴォレット様はまた妙な事を言い出し始めましたな……」

「やはりあの男の影響か」

「無技の民など保護して、どうしようというのだ？」

官僚達がヒソヒソと囁<sup>ささや</sup>きあう中、父王エスヴォブスの許しを得たヴォレットは早速、悠介と保護条例の中身を考えようと部屋に戻って行くのだった——スキップで。

#### 4

「ユースケはガゼッタという国の事をどこまで知っておる？」

「名前くらいしか知らないな」

「そうか、わらわもよく知らん」

「なんじゃそりゃっ」

エスヴォブス王から無技の民を対象にした保護条例を定める約束を取り付け、中身をどうしようかと考えていたヴォレットはふと、悠介の話にあったシンハのことを思い出し、何かの参考になるかもしれないと話題を振った。

「詳しくは知らないが、ゼシャルドから聞いた事があるのじゃ。あの国の王は無技の民じゃ、と」「それって、無技の民の国があるってことか？」

よく分かったのじゃと答えたヴォレットはクレイヴォルに視線を向ける。『何か知っていよう？』という目配せを受けたクレイヴォルは、渋々といった様子で自分の知るガゼッタ国について語った。

国境の大部分をノスセンテス国と隣接するガゼッタは、国土の殆どが険しい山岳地帯となっている。ブルガーデンとの国境に近い場所に首都らしき街があり、特にこれといって特筆するようなモノも無い、表向きは到って普通の等民制国家という印象を受ける。

が、実際に国を動かしているのは広大な山脈のどこかに存在する王都と、そこに君臨する無技の王なのだという。ガゼッタ領の山岳地帯には戦士の訓練施設が点在しており、そこでは大勢の『無技の戦士』が育てられているのだそうだ。

「ノスセンテスもブルガーデンも、無技の戦士の存在を知っていながら目を逸らしている」

あまり大きな声で口にする事は憚<sup>はば</sup>られるが、実は無技の民は神技の民よりも、生命力や基礎身体

能力が優れているらしい事が学者達の研究で分かっているのだと、クレイヴォルは若干声を潜めながら語った。

これらの研究結果や内容は一般には公にされていない。一部の国防に携<sup>たずさ</sup>わる高官や学者達しか知らない事である。悠介は今の話に思い当たる節があった。スンやバハナおばさん達に『見た目細いのに力あるなあ』という印象を持った事は、一度や二度ではない。

「実際、無技の民からは神技の波動を感じ取れないからな、気配を消して接近されると風技の索敵でなければ見つけるのは難しい」

正面から戦えば攻撃系神技を持つ者が有利かと思われるが、接近されたり弓を使われればその限りではない。

『無技の戦士』の存在については、衛士達の間でも時折噂になる。神技を宿さない無力な民であるはずの無技人に衛士が倒されたなどという話は、確かにあまり大きな声では言えないことだった。無論『一般人同士』レベルであれば絶対的に神技の民が有利だが。

「うーん、無技の民って実はファイター系のキャラなのか……？　だとすると——」

「なんじゃ？　それは」

はてなマークを浮かべたような顔で首を傾げているヴォレットに笑みを返しつつ、悠介は思い付いたアイデアを話した。

- ・フォンクランク領内に住む全ての無技の民をサンクアディエットの清掃人に任命する。
- ・街の各区画清掃は無技の民の義務とする。
- ・無技の民は清掃を他人から強制されないものとする。
- ・清掃報酬は宮殿より支払われるものとする。

「清掃人……無技の民を街に入れるのか？」

「ふむ、宮殿が雇いこむ形にする事で、不逞<sup>ふてい</sup>の輩を牽制するわけじゃな」

街の清掃は月に何度か日雇いの者が当たっており、ゴミなどを風技で簡単に吹き飛ばしたり、石畳を水技で洗い流したりしている。しかし、吹き飛ばされたゴミは路地裏にたまり、石畳の水洗いも適当<sup>まば</sup>で疎<sup>まば</sup>ら、ぶっちゃけあまり清潔とはいえない。

高民区や中民区も通りは綺麗に見えるが、裏に回れば——である。悠介がここ数日、街を走り回って気付いた事だった。

「まあ、いきなり上の区画を任せようと思ってもどうせ反対する奴が出るだろうから、最初は低民区からな」

区画ごとに担当衛士を決めて彼等の監督の元に清掃を行うという形式を取る。掃除用具は悠介が

作るつもりでいた。報酬の支払い方や、その為の予算枠も決まなくてはならないので、この辺りは経理の者と相談して決める。

「……狙いは分かるが、果たしてそう上手くゆくのか？」

無技の民が街中を歩くことに住民から不満の声が上がらないか、そもそも強制しない義務という時点で無技人達にどの程度の参加が見込めるのか、というクレイヴォルの懸念に対して悠介は「まずは触れ合える環境から作るんだ」と説明した。

「炎神隊長殿はあんま下街とか歩かないだろうから知らないのかもしれないけど、表通りでも無技人の姿は結構見かけるぞ？」

外周で屯<sup>たむろ</sup>する無技人を即席使用人として荷物運びなどに雇っている者はよく見かける。荷馬車の番にも雇われるように、彼等の仕事ぶりが誠実であるという認識は、殆ど意識しないレベルで街の住民や商人達の間に定着しているのだ。

イフォカの例から見ても、外周の無技人街は長い年月サンクアディエットの発展と共にあり続けているので、低民区の住民には子供の頃に無技の子達と遊んだ経験がある者も多い。親が禁止する家も当然あったであろうが、子供達はその辺り無垢<sup>むく</sup>である。

成長するに従い、無技の民に差別感情を持つ人々がいる一方で、成人した後も友人として付き合い続ける人々もいるのだ。



「中民区とか高民区の下街におりて来ないような環境で育った人らも、よく分かってないと思うしな」

四大神信仰と子供の頃からの刷り込みで『下賤なるモノ』<sup>げせん</sup>と思い込んでいるだけなので、何故そうなのかと深く理由を考えた事も無いだろうと悠介は指摘する。

「俺はあんまり詳しくないんだけど、四大神信仰の教義って無技の民と交流する事に何か触れる部分とかがあってあるのか？」

「ん？ そういえば、特に思い当たらぬな……クレイヴォルは何か知っておるか？」

「一応『神の祝福を受けぬ者は彼の地<sup>か</sup>へと追放されん』という一節がありますが……」

『彼の地』ってどこよ？ というツツコミに答えてくれる記述はないそうだ。また、そういった教義の一節を理由に無技の民を国内から追放しようという声も無く、極端な人種差別主義者のような存在も見受けられない。

「それなら大丈夫だろ、教義で人を殺したりするような事があるなら、ちよつと話も変わってくるけど」

信仰の教義に反するからなどという理由で反対する者が出た場合はかなり難しい問題となるが、それが無いのなら大丈夫だろう、と悠介は割と楽観的に考えていた。普段の生活の中で無技人の存在が当たり前になる事、『慣れる生き物』である人の性質に期待する。

無技の民を街の清掃人に就かせる保護条例が公布されたのは、それから数日後のことだった。



サンクアディエツトで保護条例が公布される少し前――

ブルガーデン第一首都、山頂の街コフタ。この街からもう少し山を登った先にシャルナー神殿がある。水巫女の女王リシャレウスへの謁見を明日に控えたゼシャルドは、コフタの街が昔の旅で訪れた時と殆ど変わりにくある事に感慨を覚えていた。

同時に、女王と良好な関係を築くことが出来れば、ブルガーデンとの関係も大きく違ったモノに出来ると確信した。

コフタの街で見かける無技人たちはパウラと違ってきちんと服も着ており、靴も履いている。皆例外なく所有者の存在を示す腕輪、奴隷の腕輪をつけてはいるが、表情は明るく健康的である。

彼等は神殿が所有する奴隷であり、神殿の所有は女王の所有、彼等は女王の奴隷という庇護<sup>ひご</sup>の下、街で平穩に暮らしている。本来その身の束縛を意味する奴隷の腕輪は、彼等の身を守る盾となっているのだ。

（同じ国内でも女王と最高指導官の統治にここまで違いがあるとはな……）